

マレーシア 美食と歴史的建築の国

すが 須賀 つとむ 努

コラムニスト・アジアウオッチャー

今年2月にマレーシア、ボルネオ島を旅して、ちょっと嵌ってしまった感がある。最近では2-3年に一度しか行かなかったところに今年2回目だ。マレーシアは意外なほど美食があり、また歴史的な建造物も多い。今回はマレーシア西海岸を旅した様子を紹介したい。

アロースター

タイ国境から車で1時間ほどのところにあるアロースターという街は、日本人には殆ど馴染みはないだろう。だがここは、先日92歳で首相に返り咲いたあのマハティール首相の出身地である。実は初代のトゥンク・アブドゥル・ラーマン氏もこの街の出身だから、ある意味で政治的には特別な存在といえる。

橋を渡ってちょっと郊外という雰囲気なのに、マハティール首相の生家はあり、今は博物館になっている。最近マハティールが首相に返り咲き、俄かに注目を集めているようで、マレー系の見学者が多く来ていた。彼の生い立ち、人となりが見られる展示がされていたが、写真不可のため記憶に留めるしかない。あの老獪な政治家は一体どのように誕生したのか、とても興味深い。

この街のもう一つの見どころ。それは街の中心に輝く、1912年に建造されたザヒール・モスクであろう。何とも格好の良いモスクでしばし見とれる。マレーシアでも最も美しいモスク、ともいわれているらしい。付近には時計台があり、如何にもイギリス植民地の様相がある一方、その向こうには真新しいアロースタータワーが見え隠れするのが面白い。

ペナン

アロースターから列車で1時間行くと、バターワースに着く。ここからフェリーでペナンへ渡ることができる。20分でペナン側へ着くから、まあ香港のスターフェリーみたいなものだろうが、違うのは船が大型で車も一緒に乗っているところか。

ペナン側に着くとバスに乗り、コロニアル風の建物が続いている場所で降りる。因みにペナンには無料バスが走っており、観光地を効率的に回ることが可能だ。フォートから海沿いを歩くと、気持ちの良い風が吹き抜ける。そこには第二次大戦で亡くなった人々の慰霊碑が建っており、中にはあの日本軍が指揮して沢山の犠牲者を出した泰緬鉄道建設で亡くなった人々が含まれているのが目を惹いた。

夜も9時を過ぎると普通の食堂は閉まってしまうが、何と飲茶屋は午前零時まで開いている。これは広東風夜飲茶の習慣が伝わっていると思われる。点心はどれも本格的な味で、お茶も鉄観音茶を注文して、一人飲茶を展開する。店員は何とベトナム人だった。彼の友人の何人もが、今日本で働いており、彼も日本へ行きたいという。私には是非日本で働いてくれ、とはとても言えなかった。

イポー

イポーの街歩きが大好きだが、その理由はおそらく『華人の街』だからではないかと思っている。マレーシ



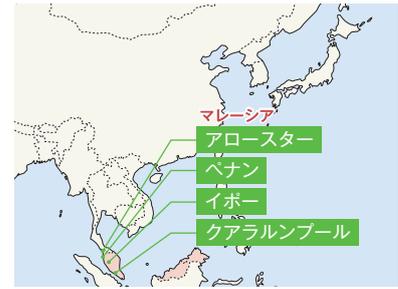
写真1 イポー
カレー麺+福建麺



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



アはマレー系が人口の7割近くを占め、2割強の華人はマイノリティーだが、ここイポーは華人口が7割であり、華人的な雰囲気が濃厚で、何だかホッとしてしまうのだ。100年以上前に錫鉱山労働者として多くの中国系の人々が流入した。ここにもかなり古い街並みがきれいに残り、観光客を集めている。

だがイポーといえば観光客のお目当てはその美食だろう。イポーは白珈琲の発祥の地でもあり、郊外の瀟洒なカフェでその歴史が分かる。平日の午前中なのに満席で、しばし古い道具などの展示物を見る。実はイポーで食堂やカフェをやっている人は海南人が多く、この白珈琲も海南人が始めたという事実を知る。

翌朝は早起きして、イポー名物「カレー麺」を作る食堂の三代目とたまたま知り合ったので店を覗いた。彼の原籍もやはり海南島だった。店は既にかなり客がいて、人気店であることは一目で分かる。お勧めの麺を出してもらったところ、カレー麺と福建麺が半々で、カレーを少しずつ混ぜて食べるとなぜか絶妙な味になる。スープもうまい。何とも驚きの麺であり、次回も必ず食べたい麺として記憶に残った。デザートは煮卵も甘いスープに入っており、こちらもかなりの一品。

クアラルンプール (KL)

街の中心に見えるのは、大きなマスジットジャメ・モスク。遠目からもかなり美しい外観で惹き付けられた。1909年建造とあり、KLの中心的なモスクだ。そこから少し歩くと、古めかしい建物が登場する。元々鉄道局のビルだ。その向こうにはマジェ

スティックホテルが見える。マレーシアは全体的にそうだが、特にKLはコロニアルとイスラムの調和がある街だと思う。

午後1時半を過ぎているのに、満員の店があったので覗き込むと店主が華語で話しかけてきたので吸い込まれた。海南チキンライスを食べる。私は基本的に1日2食ならチキンライスだけ食べていれば十分だが、特に蒸しと焼きの両方が食べられると嬉しい。活気がある店で食べるとその味がまた良くなる。但し本家海南島には海南チキンライスは元々存在しない。

KLの港町クランは、KLの中心地から列車で約1時間。ここにはマレーシア最大の港がある貿易の拠点であり、港湾労働者として中国系の人々が流れ込んできた街だ。低賃金で重労働のなか、彼らは少しでも栄養を取ろうと、僅かな肉が付いた骨を煮込んだのが、肉骨茶である。因みに茶は入っておらず、漢方薬の生薬などで煮ている。

クラン発祥の肉骨茶の80年以上続く専門店に出向いた。ここでは店主がわざわざ肉のどの部位が食べたいかと聞いてくるほどこだわりがみられた。現在の肉骨茶は肉が十分に厚く煮込まれており、その濃厚なスープをご飯に掛ければ何とも絶品だ。多民族国家マレーシアはさまざまな食事が絶妙にミックスされており、また植民地とイスラム建築の調和も十分に見ごたえがある、旅行者にとっては楽しい国だ。



写真2 KL マスジットジャメ・モスク